

# 卷 頭 言

国際経営研究所所長 照屋 行雄

迫り来る21世紀は、個人も企業も国家も、国際化の中での個もしくは個性の確立が厳しく求められる時代となる。生産・消費のボーダレス化や生活・文化のグローバル化が進展する社会は、他方であらゆる領域やレベルでの個性の確立を必要とするのである。

企業の場合を例に、この個性の確立について考えてみたいと思う。企業の個性を確立するということは、企業経営の自立をはかることを意味する。経営の自立は、企業経営における自主、自律、自尊の総合的所産である。すなわち、意思決定における自主性、企業行動における自律性および経営管理における自尊性が確保されることによって、企業経営の自立が達成され、企業の個性が確立するのである。

意思決定における自主性とは、第一に戦略思考に基づく経営意思決定の適時性・迅速性であり、第二に有用な経営・財務情報に基づく経営判断の合理的な形成である。事情に精通した適切な判断と連続した迅速な決定が確保されなければ、生き残りをかけた新しい時代の企業戦線から脱落することになる。

また、企業行動における自律性とは、第一に意思決定者の高度な倫理性と社会的責任の明確化であり、第二に地球資源の保全・再生思考に基づく環境共生の企業行動スタイルである。自社の非行や不祥事に対する抑止装置を整備できない企業や責任の所在を明確にできない経営は、グローバル時代にあっては社会的存立基盤を失うことになる。

そして、経営管理における自尊性とは、第一に自社が年月をかけて形成した経営上の強み（コア・コンピタンス）を生かすことであり、第二に自社の社会的貢献に全ての構成員が自信と誇りを保持することである。自社の経営に自信と誇りをもつことによって、自社の強みをより正しく認識し、生かすことができるのである。

このように自主、自律、自尊の経営を目指すことにより、企業経営の自立が達成されるといえよう。経営の自立が達成された企業にあっては、企業それ自体の個もしくは個性が確立することとなる。国際化が進展している状況の中で、企業が勝者として生き残り、しかも長期にわたって発展していくためには、個性ある経営体としての企業をつくり上げることが強く求められる。

企業の個性を確立し、国際化のもたらす各種の世界標準（グローバル・スタンダード）との調和をいかに合理的にはかかっていくかが、21世紀を迎える我が国企業経営者並びに他の構成員に課せられた大きな責務といわなければならない。